

神戸女学院の英語教育
—明治時代の教科書—

原 田 園 子

Summary

English Textbooks Used at Kobe College in the Meiji Period

Sonoko Harada

Textbooks used in English classes at the middle school department of Kobe College in the Meiji Period are found out from records in school catalogues or regulations and are identified. The title, the author, the publisher, and the year of publication are checked and the textbook itself is confirmed. The high quality and quantity, extensiveness and intensiveness, of English teaching during the era is shown by connecting each of the textbooks to a particular subject and class in the English curriculum at that time which is presented within the framework of changes in the school system.

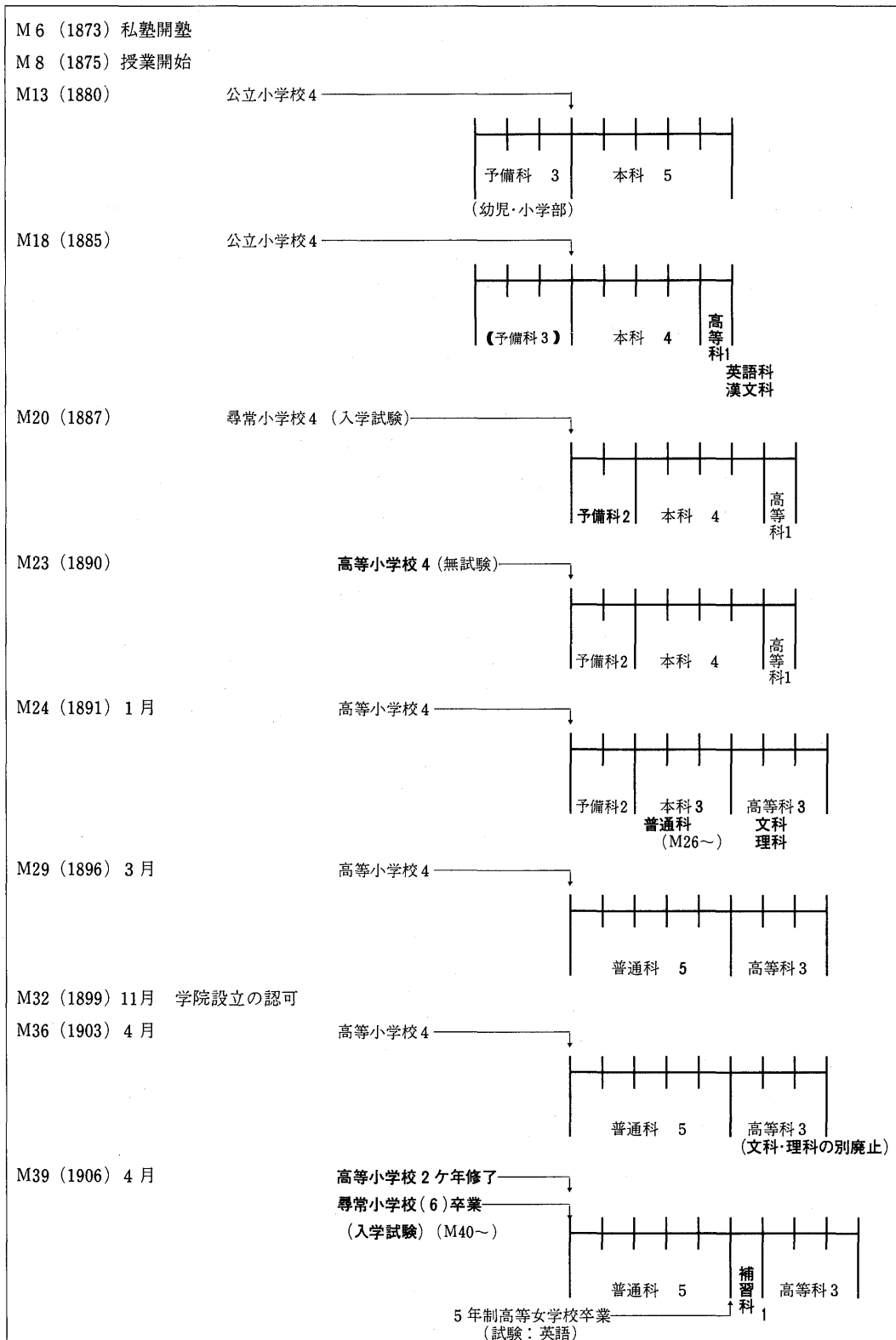
中等教育部門

日本が、明治維新（1867）によって、ようやく近代化の道歩み始め、兵庫が開港（明治元年1868）され、明治6年（1873）2月にキリスト教禁制の高札が撤去された直後の3月来日した、プロテスタント教会組合派の米国伝道会より派遣された女性宣教師によって、神戸女学院は、明治8年（1875）に創立された。派遣母体である伝道会では、キリスト教伝道と共に、この教育機関において、将来、同じ日本女子への教育者となるべき人材を養成するという意図があった。従って、この学院には、この教育目標達成への教育方針として、キリスト教伝道という宗教教育、女子教育、さらに、教育者養成という三つのものがあった。これらの目標達成のためには、当時の西洋文明においてはまだ未開・後進国であった日本の、他の教育機関と同じく、英語は必要不可欠なべき手段であった。これに加え、他のミッションスクールと同じく、教育の中心的存在であった宣教師教員達の、キリスト教信仰に根ざした精神的促しからくる、教育と伝道への熱意が英語教育そのものにも大きく反映していたと思われる。授業は厳しく、多くを生徒に課し、努力とその成果が期待されていたものであった。明治時代にこの学院で学んだ初期の卒業生達は、皆、同様に、宣教師である米人教師による英語の発音の徹底した指導ぶり、英作文の添削のきめ細かさ、生半可なことでは認めてもらえない予習、復習の厳しさ等を述べている。

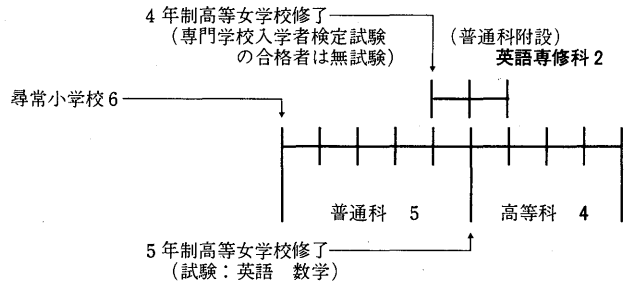
本稿は、学校組織のまだ定まらない、日本の近代化の急ぎ行われていた時代の初期に、一私立学校であり、ミッションスクールである神戸女学院において、どのような学校組織、そして学科組織のなかで、当時の中等教育部門であった、予備科、本科／普通科／普通部において、どのような英語科カリキュラムにおける英語の授業で、どのような教科書が使われたのかを掘り起こしたものである¹⁾。

(82)～(83)頁の表Aは、明治時代における学院の、学科組織の変遷である²⁾。明治6年(1873)私塾が開かれ、明治8年(1875)学校としての授業がはじまった。当時は、初等教育に相応する3カ年の予備科と5カ年の中等教育部門である本科があった。明治18年(1885)、予備科が徐々に廃止されることになり、同時に高等科が設置された。明治20年(1887)からは、中等教育が中心になり、尋常小学校4カ年を終えた女子が2カ年の新たな予備科に入学する学校組織になった。明治24年(1891)からは、高等科に力をいれはじめており、予備科2カ年、本科3カ年、高等科3カ年の組織となった³⁾。明治29年には、予備科と本科が合併され、普通科5カ年の中等教育部門となった。以後、明治、大正時代を通して昭和19年(1944)まで中等教育部門は5カ年のものと定まった⁴⁾。明治42年に普通科が普通部と改称された⁵⁾。

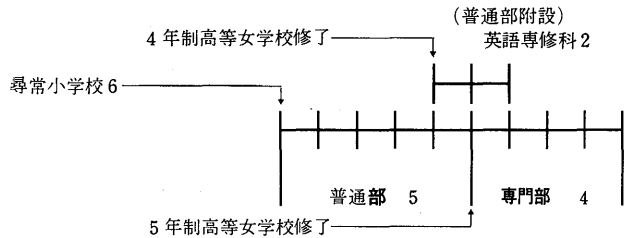
表 A : 学科組織改正略図 (英語専攻関係) 明治時代 (1873~1912)



M41 (1908) 10月



M42 (1909) 10月 認可



こういった学科組織の変遷の中で、本科、普通科、普通部と名称が変えられていった中等教育部門での英語授業の科目内容と時間数を、残されている規則書あるいは要覧を参考にして、整理したのが(84)頁～(85)頁の表Bである⁹⁾。各学年の週単位の英語授業時間数は、年度によって多少の増減がみられるが、5学年を通じて平均すると常に6時間前後になっている。これは、現在の学院中高部の英語時間数と大体同じであるが、注目すべき点は、当時は、英語入門期と初級・中級初期の段階である、予備科の2カ年(明治20年～28年)と普通科(明治29年～41年)/普通部(明治42年～)における第一・第二学年の英語学習の最初の2年間に週12時間～8時間と集中的な指導がおこなわれていたことである。

また、当時は英習字が他の英語授業とは別に授業時間をとって指導されており、アルファベット文字への接触が一般には無く、また、小学校でのローマ字学習がある今日とは異なっている状況が示されている。この「英習字」が「英作文」の授業へと発展していくようになっていくが、明治29年度(1896)からは、「英作文」は、英語学習の第三学年目から始めることに定まっている。

全体的な学科目内容は各年度大体において同じであるが、明治39年(1906)からは、それまでの「読本」科目が「読解」と「訳解」の別な科目に分けられているのが大きな変化である。

また、文法の授業開始時に移り変りが見られる。明治20年(1887)では、英語学習の第二学期の第二学期からであるが、明治24年(1891)からは同じ学年の第一学期からに早められ、明治29年(1896)からは再び第二学期からになり、明治36年(1903)からは第三学期、そして明治39年(1906)からは第三年目から始めることになっている。系統立てた文法指導の開始時

表B：英語科目・時間数（明治時代）〔予備科・本科／普通科／普通部〕

	予備科						本科												
	第一学年		第二学年				第一学年			第二学年			第三学年			第四学年			
	第一学期	第二学期	第三学期	第一学期	第二学期	第三学期	第一学期	第二学期	第三学期	第一学期	第二学期	第三学期	第一学期	第二学期	第三学期	第一学期	第二学期	第三学期	
M20 (1887)	読本①1 *	読本 2	読本 2	読本 3	読本 4	読本 4					読本 5								
	会話	会話	会話	会話			英語	英語											
					入門文法	入門文法												教授法 理論実習	
	書き方 作文	書き方 作文	書き方 作文	書き方 作文	書き方 作文	書き方 作文	書き方 作文	書き方 作文	書き方 作文										
M24 (1891)	読本①1 2 ** (4)	読本 3 (4)	読本 3 (4)	読本 4 (4)	読本 4 (4)	読本 4 (4)									英文学 散文		英文学 詩		
	会話 (4)	会話 (4)	会話 (4)																
				英文法 (4)	小文法 (4)		英文法 (4)	英文法 (4)								(4)		(4)	
	英習字 (作文) (唱歌) (4)	英習字 (作文) (唱歌) (4)	英習字 (作文) (唱歌) (4)	英習字 (作文) (唱歌) (4)	英習字 (作文) (唱歌) (4)	英習字 (作文) (唱歌) (4)													
						英作文 (4)	英作文 (1)	英作文 (1)	英作文 (1)	英作文 (1)	英作文 (1)	英作文 (1)	英作文 (1)	英作文 (1)	英作文 (1)	英作文 (1)	英作文 (1)	英作文 (1)	
																能弁法 (4)			
M25 (1892)	読解③														英文学 散文⑤ (4)	英文学 詩⑥ (4)			
							文法④						文法 (4)	文法 (4)					
	書き方 英作文 (10)						英作文 (1)	英作文 (1)	英作文 (1)	英作文 (1)	英作文 (1)	英作文 (1)	英作文 (1)	英作文 (1)	英作文 (1)	英作文 (1)	英作文 (1)		
																		能弁法 (4)	
M26 (1893) M27 (1894)	予備科						普通科												
	読本①1 2 (4)	読本 3 (4)	読本 3 (4)	読本 4 (4)	読本 4 (4)	読本 4 (4)													
	会話 (4)	会話 (4)	会話 (4)								詩文集 (1)	詩文集 (1)	詩文集 (1)	詩文集 (4)	詩文集 (4)	詩文集 (4)			
				小文典⑧ (4)	小文典 (4)		文典⑨ (4)	文典 (4)											
	英習字 (1)	英習字 (1)	英習字 (1)	英習字 (1)	英習字 (1)	英習字 (1)													
					英作文 (4)	英作文 (1)	英作文 (1)	英作文 (1)	英作文 (1)	英作文 (1)	英作文 (1)	英作文 (1)	英作文 (1)	英作文 (1)	英作文 (1)	英作文 (1)	英作文 (1)		

M29 (1896) M31 (1898)	普通科															
	第一学年				第二学年			第三学年			第四学年			第五学年		
	第一学期	第二学期	第三学期	第四学期 ***	第一学期	第二学期	第三学期	第一学期	第二学期	第三学期	第一学期	第二学期	第三学期	第一学期	第二学期	第三学期
	読本 1 (4)	読本 2 (4)	読本 2 3 (4)	読本 3 (4)	読本 4 (4)	読本 4 (4)	読本 4 (4)									
	会話 (3)	会話 (3)	会話 (3)	会話 (3)	会話 (3)											
						小文典 (3)	小文典 (3)	大文典 (4)	大文典 (4)	英語 (3)	英語 (1)	英語 (1)	英語 (1)	名家著作 (4)	名家著作 (4)	名家著作 (4)
	英習字 (1)	英習字 (1)	英習字 (1)	英習字 (1)	英習字 (1)	英習字 (1)										
							英作文 (1)	英作文 (1)	英作文 (1)	英作文 (1)	英作文 (1)	英作文 (1)	英作文 (1)	英作文 (1)	英作文 (1)	英作文 (1)
M32 (1899) M35 (1902)	読本 1 (4)	読本 2 (4)	読本 2 (4)	読本 3 (4)	読本 3 (4)	読本 4 (4)	読本 4 (4)									
		会話 (3)	会話 (3)	会話 (3)	会話 (3)					英語学 (3)	英語 (1)	英語 (1)	英語 (1)	名家著作 (4)	名家著作 (4)	名家著作 (4)
						小文典 (3)	小文典 (3)	大文典 (4)	大文典 (4)							
	英習字 (2)	英習字 (1)	英習字 (1)	英習字 (1)	英習字 (1)	英習字 (1)										
							英作文 (1)	英作文 (1)	英作文 (1)	英作文 (1)	英作文 (1)	英作文 (1)	英作文 (1)	英作文 (1)	英作文 (1)	英作文 (1)
M36 (1903)	第一学期	第二学期	第三学期	第一学期	第二学期	第三学期	第一学期	第二学期	第三学期	第一学期	第二学期	第三学期	第一学期	第二学期	第三学期	
	読本⑩	読本	読本	読本	読本⑩	読本										
	会話 (6)	会話 (3)	会話 (3)	会話 (3)	会話 (3)	会話 (3)	英語 (3)	英語 (1)	英語 (1)	英学 (3)	英学 (3)	英学 (3)	名家著作 (5)	名家著作 (5)	名家著作 (5)	
						文典⑩1 (3)	文典 1 (1)	文典 2 3 (4)	文典 2 3 (4)							
	英習字 (2)	英習字 (1)	英習字 (1)	英習字 (1)	英習字 (1)	英習字 (1)										
							英作文 (1)	英作文 (1)	英作文 (1)					英作文 (1)	英作文 (1)	英作文 (1)
M39 (1906) M41 (1908) M42 (1909) (普通部と改称) M43 (1910) M45 (1912)	読解⑬ ㉔ 会話 (3)			読解 会話 (3)			読解 会話 (3)			読解⑬ ㉔ 会話 (2)						
	訳解⑯ ㉔ (2)			訳解 (2)			訳解 (1)			訳解⑯ ㉔ (2)			訳解⑯ ㉔ (1)			
							文法⑰ ㉔ 英作文 (2)			文法 英作文 (2)						
	英習字 (1)			英習字 (1)									文学⑰ ㉔ 英作文 (4)			
													通訳 (1)			

①～㉔ 規則書に教科書名が記載されていたもの。Cf. 表 C

* 読本の数字は教科書の巻号を示す。

** ()内の数字は週毎の時間数を示す。

*** 明治29年より普通科への入学が4月からになり第一学年だけが翌年6月までの4学期制になった。
明治36年より全学年が4月開始となった。(以前は9月が学年度始まりであった。)

宣について検討が繰り返されていたことが分かる。

表の中で①～⑫を付している授業科目は、規則書や英語版の便覧に使用教科書名あるいはその著者名が記されていたものである。これらを手がかりに、開塾当時から使用された英語科目

表C：明治時代の英語科目教科書 [予備科・本科/普通科/普通部]

* この表に初出で特定できたもの

M 6 (1873)	①	読本：Barnes, (1883) / Swinton (1883)	?
M11 (1878)		『第一第二リードル』	
	*	Willson, Marcius (1860) <i>The First Reader of the School and Family Series.</i>	
		New York : Harper & Brothers.	
M20 (1887)	①	読本：Barnes, (1883) / Swinton (1883)	?
M24 (1891)	②	読本：スイントン読本 (1～4)	
	*	Swinton, William (1883) <i>Swinton's Primer and First Reader.</i> Chicago : Ivison, Blakeman, Taylor, & Company.	
		(1882) <i>Swinton's Second/Third/Fourth/(Fifth) Reader.</i>	
M25 (1892)	③	読本：Barnes	
	*	Barnes's <i>New National Readers</i> : Barnes, Charles J., Ballard, Harlan H., & Thayer, S. Proctor (1883, 1884) <i>New National First/Second/Third/Fourth/(Fifth) Reader.</i>	
	④	文法：Swinton	
	*	Swinton, William (1877) <i>New Language Lessons : An Elementary Grammar and Composition.</i>	『小文典』
	*	(1877) <i>A Grammar Containing the Etymology and Syntax of the English Language.</i> New York, Cincinnati, Chicago : American Book Company.	『大文典』
	⑤	散文：“Tanglewood Tales”	
	⑥	詩：“Marimon and Douglas”	
M26 (1893)	⑦	読本：ナショナル	
M27 (1894)		Barnes, <i>New National First/Second/Third/Fourth Reader.</i>	
	⑧	小文典：スイントン	
		Swinton, <i>New Language Lessons : An Elementary Grammar and Composition.</i>	
	⑨	文典：スイントン氏	
		Swinton, <i>A Grammar Containing the Etymology and Syntax of the English Language.</i>	
M36 (1903)	⑩	読本：第一学年～第二学年第一学期 和田垣	
		和田垣謙三 (?) <i>New English Readers</i> 開成館	?
	⑪	第二学年第二学期～ 神田	
	*	神田乃武 (1899) <i>New Series of English Readers.</i>	
		(1900) <i>Kanda's New Series of English Readers.</i> 全5巻	}?
		(1903) <i>Kanda's New Series of English Readers.</i> 全6巻 三省堂	
	⑫	文典：ネスフィールド	
	*	Nesfield, J. C. (1895) <i>English Grammar Series.</i> London : MacMillan.	
		Book I : <i>The Parts of Speech</i>	
		Book II : <i>Easy Parsing and Analysis</i>	
		Book III : <i>Idiom and Grammar</i>	
		(Book IV : <i>Idiom, Grammar, and Synthesis</i>)	

M41 (1908)	⑬	読解：第一学年～第三学年	a series of readers	
	⑭	第四学年	<i>Famous Stories</i> by Sakurai <i>Beginners' American History</i> by Montgomery * Montgomery, D. H. (1890) <i>The Leading Facts of History Series</i> . Boston : Ginn & Company.	
	⑮	文学：第五学年	<i>Tales from Shakespeare</i> by Lamb * Lamb, Charles (1807) <i>Tales from Shakespeare</i> . <i>Little Lord Fauntleroy</i> * Burnett, Francis E. (1886) <i>Little Lord Fauntleroy</i> . <i>Evangeline</i> * Longfellow, Henry Wadsworth (1847) <i>Evangeline : A Tale of Acadie</i> .	
	⑯	読解：第一学年～第三学年	a series of readers	
	⑰	第四学年	<i>Water-Babies</i> by Kingsley * Kingsley, Charles (1863) <i>The Water-Babies</i> . <i>Biographical Stories</i> by Hawthorne	
	⑱	第五学年	<i>Twice-Told Tales</i> by Hawthorne * Hawthorne, Nathaniel (1837) <i>Twice-Told Tales</i> .	
	⑲	文法：第三学年, 第四学年	<i>English Grammar II</i> by Nesfield Nesfield, <i>Easy Parsing and Analysis</i> .	
	M45 (1912)	⑳	読解：第一学年～第三学年	a series of readers
		㉑	第四学年	<i>Stories of Famous People</i> <i>Beginners' American History</i> by Montgomery Montgomery, <i>The Leading Facts of History Series</i> .
		㉒	文学：第五学年	<i>Tales from Shakespeare</i> by Lamb Lamb, <i>Tales from Shakespeare</i> . <i>Little Lord Fauntleroy</i> Burnett, <i>Little Lord Fauntleroy</i> . <i>Evangeline</i> Longfellow, <i>Evangeline : A Tale of Acadie</i> .
		㉓	読解：第一学年～第三学年	a series of readers
		㉔	第四学年	<i>Biographical Stories</i> by Hawthorne <i>English Stories</i> by Tsuda * 津田梅子 (1901) <i>English Stories Selected for Japanese Students</i> . 文武堂
		㉕	第五学年	<i>The Youth's Companion</i>
		㉖	文法：第三学年, 第四学年	<i>Intermediate English Grammar</i> by Kanda * Kanda, Naibu (1899, 1900) <i>Intermediate English Grammar</i> . 三省堂

の教科書で分かったものと、それらの中で特定できたものを一覧にしたのが次の表Cである。

明治6年(1873)の開塾当時は、教材として“The Peep of Day”⁷⁾が使われていた。その他のテキスト等はまだなかったようである⁸⁾。明治11年(1878)3月15日号の『七一雑報』の記事「神戸女学校の話」⁹⁾にある“第一第二リードルの組”で使われていたリードル、すなわち読本

は、何であったかの記録はないが、明治時代前半に日本でよく使われていたという Barnes, Swinton, Willson のリーダー¹⁰から探してみると、Swinton のもの（後述）や Barnes の *New National Readers*（後述）は明治 16 年（1883）出版であるので、当時既に出版されていた Willson のリーダー（1860 全 3 巻）ではなかったかと思われる。

明治 20 年（1887）の Searle 女史の自筆による「回報」に、残されている資料として最も古い学院のカリキュラムを知ることができる。これに記載されている「読本」の授業で使われていたリーダーについて検討してみると、出版年からの可能性としては、上記の Willson, Swinton あるいは Barnes のどれもが該当することになる。学院に保存されている最も古い印刷された規則書である、明治 24 年（1891）6 月発行の「英和女学校規則」を見ると、印刷では第一学年第一学期の「読本」が“第二”となっている。また、予備科への入学資格は高等小学校卒業者は無試験であるがその他は試験を課するとあり、試験科目中の一教科に「英学」がある。この英語テストの範囲として「ナショナルリード第一」と記されている。これは Barnes のリーダーの第一巻である。しかしその上に墨で線がひかれ消され、授業科目表の方でも読本は第一からはじめるように訂正されている。一方、発行月は不明だが、同年度用の「神戸英和女学校規則要覧」には第一学年には“スワントン第一第二読本”と印刷されており、入学試験科目には英語はふくまれていない。以上のことから考えられることは、この年度の前年迄は、つまり明治 20 年には、Barnes が使われていたか、または既に Swinton を使っていたか、のどちらかであったということである。さらに、このことより、何年度からかは分らないが、明治 23 年度（1890）までは第一学年は第二巻から始められており、Barnes を使っていたことが察せられる。

明治 24 年度の「読本」では、上記のように、Swinton の *Swinton's Primer and First Reader*（1883）、*Swinton's Second/Third/Fourth Reader*（1882）が使用されていた。

明治 25 年度（1892）の教材については、英語版便覧によると、「読解」用のリーダーは Barnes の *New National Readers*、「文法」は Swinton を使用となっている。Barnes のリーダーは全 5 巻の *New National First/Second/Third/Fourth/Fifth Reader*（1883, 1884）である。Swinton の文法書には、それぞれ『小文典』と『大文典』と呼ばれている *New Language Lessons: An Elementary Grammar and Composition*（1877）と *A Grammar Containing the Etymology and Syntax of the English Language*（1877）の二冊があるが、予備科で『小文典』、本科で『大文典』が使われたと思われる。なぜなら、表 B にあるように、翌明治 26 年度（1893）の和文の規則書に「小文典」と「文典」の二科目名がみられ、また『大文典』には“*For Advanced Grammar Grades, and for High Schools, Academies, Etc.*”と、内表紙のタイトルが続いており、また内容も、現在の高校英語レベルのものと思われるので、この書は当時の中学校上級用と判断できるからである。

この年度の「英文学」のテキストは、同じ英語版便覧によると、「散文」では“*Tanglewood Tales*”，「詩」では“*Marimon and Douglas*”となっているが、著者や出版社については不明である。

明治 26, 27 年度の「読本」は“ナショナル”，「小文典」は“スイントン”，「文典」は“スイ

トン氏”と規則書に印刷されている。それぞれ上記の Barnes のリーダー、Swinton の文法書である。

明治 36 年度 (1903) のものについては、この年度の規則書には、「読本」は第一学年から第二学年第一学期までは「和田垣」、第二学年第二学期からは「神田」と書かれている。“和田垣”は、当時の英学者和田垣謙三 (1860～1919) とと思われるが、リーダーそのものはまだ特定できていない¹¹⁾。

“神田”は神田乃武 (1857～1923) 著のリーダーのことである。これには改訂を重ねた同様の名称のものがいくつかあるが、当時最新の明治 36 年版の *Kanda's New Series of English Readers* (全 6 巻) が使用されたのではないと思われる。表 B から分るように、この年度より新学年度始めが全学年 4 月になり、カリキュラム内容が大幅に変えられているので、これを機して読本を最新のものに変えたと考えられるからである。しかし、第何巻から使用したのかは分からない。

この明治 36 年度から、文法は第二学年の第三学期から始められることになっており、テキストも「ネスフィールド」に変わっている。“ネスフィールド”とは J. C. Nesfield 著 *English Grammar Series* (1895) のことで、これには第一巻 (*The Parts of Speech*)、第二巻 (*Easy Parsing and Analysis*)、第三巻 (*Idiom and Grammar*)、第四巻 (*Idiom, Grammar, and Synthesis*) があり、最初の二学期間で第一巻、次の二学期間で第二巻と第三巻が使われた¹²⁾。

明治 41 年度 (1908) と明治 45 年度 (1912) については、英語版便覧にほとんどの英語科目で使用された教科書が記載されているが「読解」用のテキストについては、第一学年から第三学年で使用のものは“a series of readers”と記されているだけで何を使ったのかは分からない。第四学年で使用の Sakurai の *Famous Stories* については、当時 Sakurai 姓の英語教育関係者に、桜井鷗村 (彦一郎)、桜井錠二、桜井ちか、桜井役の名がみられる¹³⁾が、誰であるかは特定できない。同じく第四学年で使われた *Beginners' American History* は、D. H. Montgomery 作の一連の歴史用テキスト *The Leading Facts of History Series* (1890) の一巻である。第五学年では、「読解」の科目が「文学」になり、Charles Lamb (1775 - 1834) の *Tales from Shakespeare* (1807) と Francis E. Burnett (1849 - 1924) の *Little Lord Fauntleroy* (1886) さらに、Henry Wadsworth Longfellow (1807 - 1882) の物語詩 *Evangeline* (1847) が使われていた。

「読解」の授業では、第一学年から第三学年までは「読解」のテキストと同じものが使われると記されている。明治 41 年度には、第四学年では Charles Kingsley (1819 - 1875) の *The Water-Babies* (1863) と Nathaniel Hawthorne (1804 - 1864) の自伝物語¹⁴⁾が、第五学年でやはり Hawthorne の *Twice-Told Tales* (1837) が使われていた。

「文法・英作文」は、明治 39 年度 (1906) より第三・四学年で教えられることになっており、明治 41 年度のテキストは“*English Grammar II by Nesfield*”となっており、これは上記の *English Grammar Series* の第二巻である *Easy Parsing and Analysis* と思われる。

明治 45 年度 (1912) の「読解」用のテキストの一つである“*English Stories by Tsuda*”は、

津田梅子 (1864 — 1929) の *English Stories Selected for Japanese Students* (1901) である。「文法・英作文」用の “*Intermediate English Grammar by Kanda*” と記載されているテキストは神田乃武 (1857 — 1923) の *Intermediate English Grammar* (1899, 1900) である。

以上が明治時代に神戸女学院の中等教育部門で教えられた英語科目の授業で使用された教科書のうちで分かっているものである。特定できず、また実物を直接検討できなかったものもあるが、これらのほとんどは、そして特に明治初期・中期に使用されていたものは、入門期、初級レベルでは、当時のアメリカで英語を母語とするアメリカ人生徒が初等、中等教育で使っていたテキストが使われ、上級の文法、作文、文学の授業でも、アメリカの中等学校の上級段階で学習される同じ内容が教えられていたことが分かる。中等学校入学時に初めて学習し始めたのに、外国語である英語の能力が卒業時までには、かなり高度な段階まで進んでいたことになり、当時の英語授業の内容の濃さと程度の高さが再認識させられる。

このような学習で習得された英語力を基に、続く高等教育部門である高等科での授業がおこなわれたのであった。この高等科での英語・英文学専攻課程で使われたテキストについては、別の機会に報告したい。

注

- 1) 本稿は、日本英語教育史学会第6回全国大会(1990年5月)で口頭発表の原稿に加筆したものである。
- 2) 明治29年に新設され明治32年に廃止された裁縫専修科と、明治39年に新設された音楽科の普通科と師範科は、筆者の最終的に目指すところが高等教育の英文学・英語専攻における“英語教育”であるので、記載していない。
- 3) 明治27年(1894)前後に補充科があって、4月から6月まで予備科入学以前に、週4時間の発音法等が教えられていた。
- 4) 明治39年(1906)に補習科が設置され普通科から高等科への橋渡しとなった。また、明治41年(1908)にはこれが廃止され、同時に高等科が4年制になり、英語専修科が設置され、4年制高等女学校修了の入学者の高等科への橋渡しとなった。
- 5) 同時に高等科が専門部と改称された。
- 6) 明治20年についてはSearle女史の自筆の「回報」によるものであるが、これには時間数が記載されていない。また、この年度から明治24年度までは、英語の授業の無い学期や学年があるが、学科目としての英語が無いだけで歴史、地理、物理、数学、化学や天文学等が英語で教えられていた。
- 7) Cf. 『神戸女学院大学論集』Vol. 36 No. 2, p. 89
- 8) 第一回卒業生市田久子氏の談話に“「a dog」等の英語を習っていたのです。書物としては「Peep of Day」と言うのがありました。何でもかでもタルカットさんが書いて下さって、それでおぼえておりました”とある(『めぐみ』Vol. 29, p. 33)
- 9) Cf. 『神戸女学院大学論集』Vol. 36 No. 2, p. 83
- 10) Cf. 『英語教育史資料』第3巻, 第5巻
- 11) 『英語教育史資料』第3巻と第5巻に、文法書の著者や、辞書の編者として名が挙げられているが、リーダーについては分からない。ただし、「大正書籍目録大正7年版総目録」(復刻昭和61年1月)に“*New English Readers (Kaiseikwan)* 法学博士和田垣謙三著 3冊”の記録がみられることが東大附属図書館の調べで分かった。しかし、明治36年当時に既に発行されていたのかどうかは分からなく、また実物の所在も分からず今のところ特定できていない。

- 12) 同じ Nesfield の *English Grammar Past and Present* (1898) が当時の高等科で使われていた。
- 13) Cf. 『英語教育史資料』第3巻, 第5巻
- 14) 何の作品であるか特定できない。

参考文献

- “Kobe Girls' School Circular” (1887 明治 20 年) [Searle 女史自筆]
「英和女学校規則」(明治 24 年)
「神戸英和女学校規則要覧」(明治 24 年)
“Courses of Study of the Kobe Girls' School” (1892 明治 25 年)
「神戸英和女学校規則」(明治 26 年)
「神戸女学校規則」(明治 27, 29, 31, 32, 35, 36, 41, 44年)
「神戸女学院規則要覧」(明治 27, 42, 45年)
“Kobe College” (1906 明治 39 年, 1908 明治 41 年, 1912 明治 45 年)
木村喜吉・高梨健吉・出来成訓編 (1980). 『英語教育史資料』第3巻, 東京法令出版.
_____. 『英語教育史資料』第5巻, 東京法令出版.
『神戸女学院百年史 総論』(神戸女学院 1976)
『神戸女学院百年史 各論』(神戸女学院 1981)
『めぐみ』第29号 (神戸女学院同窓会)

(原稿受理 1990年12月7日)